

20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義的解釈をめぐって

—遊戯概念を中心に—

教育学コース 青木 美智子

Über die romantische Fröbel Interpretation in Deutschland im 20. Jahrhundert.

—Spielbegriff als Zentralthema—

Michiko AOKI

Thema des Aufsatzes ist der Spielbegriff von Fröbel. Es werden zwei unterschiedliche Ansätze der Fröbelforschung zur Spieltheorie dargestellt. Es handelt sich dabei um den romantischen Ansatz von Bollnow (1952) bzw. Giel (1959) und das didaktische Konzept von Spranger (1935) sowie Heiland (1998/2003). Der Aufsatz zeigt, dass Kindheit und Spiel unterschiedlich interpretiert werden kann..

目次

はじめに

第一章 20世紀的フレーベル解釈の端緒として

- A. フレーベル思想の根幹としての「数学」
- B. 法則性に基づく「遊戯」と恩物の関係
- C. シュプランガー解釈と以後の研究の関係

第二章 ロマン主義的解釈をめぐって

- A. フレーベルとロマン主義
 - 1. ボルノウのロマン主義理解とフレーベル
 - 2. ロマン主義的子ども観研究とフレーベル
- B. 遊戯理論解釈
 - 1. フィヒテ「道徳力の根源として」
 - 2. ロマン主義研究における解釈
- C. 恩物における遊戯の理論

第三章 フレーベル遊戯概念の位置づけをめぐって

- A. ハイランドの遊戯概念解釈
- B. 「神性」を除外した遊戯解釈

結びに代えて

はじめに

本論の課題は、20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義的解釈を一つの主な軸として据えながら、フレーベルの遊戯概念が持つ規定的、干渉的な側面がどのように解釈されてきたのかについて検討することにある。

フレーベルのロマン主義的解釈は、H.ハイランド

が指摘するように、20世紀に入って成立してきた解釈の枠組みであり、より具体的に述べれば、E.シュプランガー (1939&1953), O.F.ボルノウ (1952), K.ギール (1959) から精神科学的教育学において繰り返し形作られてきた一つの特徴的なフレーベル像であるといえる (Heiland, 2003: 297)。これらロマン主義的な思想解釈は、フレーベル思想における「ゆり」の象徴性を際立たせることによって、ノヴァーリスの「青い花」とのアナロジカルな関係を指摘し、乳幼児の認識形式であるところのフレーベルに固有の「予感」概念に着目し、ここにロマン主義者としての霊的感覚を見出し、フレーベルの弁証法的な思考様式をロマン主義の記述スタイルと見なすことから解釈を立ててきた。このようなロマン主義的なフレーベルの解釈、つまりフィヒテやアルント、ジャン・パウロやノヴァーリスらとの思想的な連関をフレーベルに求めた解釈の、その萌芽的な着想はすでにシュプランガーのフレーベル研究にもあらわれているが、後にボルノウによって「ドイツ・ロマン主義教育学の華」として、最高潮にまで高められた。このボルノウの仕事はフレーベル思想を決定的にロマン主義と関係づけるものとなり、以後、子どもの遊戯と教育の関係を論じたH.ショイエール (Scheuerl, 1955), A.フリットナー (Flitner, 1972), ロマン主義的子ども観研究のM.S.バダー (Baader, 1996), 美学とロマン主義教育学の関係という観点からY.エーレンスベック (Ehrenspeck, 1998), そしてロマン主義的子ども観と教育学への影響をテーマとした

H. ウルリヒ (Ullrich, 1999) といった、フレーベル研究を越えた、多岐に渡る研究分野から参照枠とされてきた。

しかしこのロマン主義的なフレーベルの解釈は一方で、フレーベルの遺稿収集作業を中心とする歴史的事実主義的な研究アプローチからは、常に疑問視され、時には厳しい批判が突きつけられてきた。

とりわけその急先鋒といえるのがハイランドで、1998年にはボルノウが「象徴」や「予感」といった概念をロマン主義において解釈したことを完全に否定し、フレーベルの球体哲学は「茫洋とした詩人ではなく科学者として、知性的、意識的、「聡明な」人物として」構想されたことを主張している (Heiland, 1998: 250f)。また2003年には、フレーベルにおいてロマン主義的子ども観の完成を見出したウルリヒに対して、「フレーベルにおいてロマン主義的な子ども観はまったく成立しない」「これは全くの幻想 (Phantom) であると言わざるを得ない」と徹底的に批判している (Heiland, 2003: 301)。ハイランドの一貫した主張によれば、フレーベルはその教育学的基礎づけをアルントより多くペスタロッチに負っているのであり、思想的な文脈では、ドイツ・ロマン主義の系譜ではなく、フンボルト、ルソー、フィヒテ、ペスタロッチそして結晶学のヴァイスという、むしろドイツ観念論の文脈において理解されるべきであるという (ibid. 302)。また、ハイランドほど辛辣な言葉を用いることはなかったが、シュブランガーのもとでフレーベルの文献的な調査に携わることになり、以後生涯に渡ってフレーベルの球体法則をめぐる日記と書簡の編纂を続け、70を越える公刊物、17のカatalog集から成る重要な業績を残したE. ホフマンは、研究に着手した当初から、ロマン主義的解釈との矛盾が出発点にあったことを述べている。

…数学的に基礎付けられたフレーベルのおもちゃの、組織化された秩序のために、フレーベルがこの遊びに与えたロマン主義的な意味からの乖離が起こっている、という理解がはっきりとわたしに表れてきたのだった (Hoffmann, 1967: 260)¹。

以上のように、フレーベル思想のロマン主義的解釈は、大きなインパクトを持って迎えられ、その後もほぼ通説といえるような一定の影響を持つにいたった一方、一次史料の積み重ねによって「真のフレーベル像」²の追究を試みる実証的アプローチからは、そのような解釈枠組みの成立それ自体の不可能が指摘されてきたのである。

フレーベル研究における解釈上のこのような相違は、どこから生じたのであろうか。本論はこの問題を、フレーベルの遊戯概念をめぐる解釈から、具体的には、恩物における遊戯理論の分析によって明らかにすることを試みたいと思う。というのも、1962年、三冊から成るフレーベルの「恩物」選集³の編纂に当たったノール学派のフレーベル研究者E. ブロッホマンが、「遊戯の理論はフレーベル教育学の核心部分である」 (Blochmann, 1963: 3) と宣言することから第一選集の序文を始めているように、遊戯理論に焦点を絞ることは、フレーベル教育学全体へと開かれる鍵となるからである。フレーベル思想の解釈上の相違点は、まさに遊戯の理論をいかに解釈するか、という点において表れてくるはずだからである。

この遊戯の理論は、フレーベルの幼稚園教育学 (Kindergartenpädagogik) において、「運動遊戯」 (Bewegungsspiel)、「組み立て遊び」 (Bauspiel) そして「庭の手入れ」 (Gartenpflege) の三要素から成る。その中でも最も中心に置かれているのが「組み立て遊び」、すなわち恩物の理論である (Heiland, 2002: 56f)。したがってフレーベル思想における遊戯概念を問題にする本論でも、恩物における遊戯の思想をいかに解釈したかを分析の対象とする。

第一章 20世紀的フレーベル解釈の端緒として —シュブランガーのフレーベル研究—

ホフマンによれば、「1920年代に研究者として恩物体系の教授的な(!) 意義を指摘し得た研究者は、エドゥアルド・シュブランガーただひとりであった」という (Hoffmann, op. cit: 260)。この言葉は、20世紀的なフレーベル解釈の基点におそらくシュブランガーのフレーベル研究が置かれ得ることの、重要な手がかりを与えてくれる。

シュブランガーのフレーベル研究論文は、1939年、ベルリン、プロイセン科学アカデミー論文集において発表された。これは1840年に創設された、フレーベルの「幼稚園」百年祭のために編纂されたものである。後に1952年、フレーベルの百年忌に『フレーベルの思想界より』 (Spranger, 1972=1983) として、若干の修正を加えられ出版された。シュブランガーの門下からは、ロマン主義的解釈のアプローチと、実証主義的アプローチとの、二筋のフレーベル研究の流れが生じているのを指摘することができる。前者にはボルノウ、ギールが、後者にはホフマンがいる。現在ドイツ

におけるフレーベル研究の第一人者となったハイランドは、もともとはボルノウの系譜から研究を出発させていたが、80年代、90年代以降の彼の実績は、一次史料の収集、精査という作業によって積み上げられている。このことから、ボルノウの研究を人間学的に発展させようとしたウルリヒの解釈に対する手厳しい批判が生じるのであり、ボルノウを基点にもう一度、ロマン主義的解釈のアプローチと、実証的アプローチの二つの分岐があったと見ることもできるだろう。

いずれにせよシュプランガーのフレーベル研究には、フレーベル思想をロマン主義との関連において解釈可能であることと、恩物における遊戯の理論が数学教授との関連において解釈可能であることとの、二つの要素が提示されているのを確認することができる。

A. フレーベル思想の根幹としての「数学」

シュプランガーはフレーベル思想全体の基礎付けを、球体理論と結晶理論とに置いた。天空の理論としての「球体の法則」についてはM.ボーデの研究を、大地の法則としての結晶の「原現象」についてはCh. S. ヴァイスの結晶の理論を参照しながら分析した。その結果シュプランガーは、フレーベル思想は天地の理であるところの、自然科学的な法則を人間に告げ知らせる教育思想であるという結論に達した。

彼が発見したのは、永遠的で理念形成的な自然のなかにある始源国 (Urland) なのである。球体の法則が天体を支配し、これもまた理想形体として球を支配しているかに見える結晶形成の法則が、ものいわぬ鉱物を統括する。これらの二つの世界 (世界領域) を相互に関係づけることは、フレーベルにとっても、その本質からめざすところの最高の目標であった。(ibid. 343=74)

だがシュプランガーの論証によれば、これら二つの単純な法則から、自然の多様な段階への発展には限界があり、そこでフレーベルは自身にとってなじみ深い数学への哲学的思索によって、「球体法則から規則的な結晶形式を経て人間教育へと至る道」(ibid. 355=94) を獲得していく。このことはフレーベルが「数学は内なる世界と外なる世界の現れとして、人間にも自然にも、等しく所属している。…こうして数学は、人間と自然とを内なる世界と外なる世界とを、思考と知覚とを、結びつけるものとして、現れる」(ibid. 356=95) と結論していることにも表れているという。こうしてシュプランガーは、フレーベル教育学の基礎に数学が置かれることを導き出した。

B. 法則性に基づく「遊戯」と恩物の関係

したがって乳幼児期の教育もまた、この自然科学的な法則性との関連において考察されることになる。このモチーフが子どもの遊戯活動と結びつけられ、フレーベルに独自の遊戯思想が表れてくる。シュプランガーはこの結びつきを、フレーベルの人生にとっての「覚醒」(Erweckung) であった、とやや劇的に表現している (ibid. 343=71)。それは、「いっそう高い精神にもとづく、解放的な遊びの世界」(ibid.) への「覚醒」であった。それは、数学的な法則性に基づく遊戯の構想であった。

フレーベルにとって、高い精神を宿すものとしての子どもの遊びは、神の支配する自然に固有の、永遠の創造という根本的な法則性を予感的に捉えることから開始される。(ibid. 343=73)

数学的に基礎付けられた法則を知ること、あるいは予感的にであってもその法則性を捉えるようになることは、すなわち、世界を成り立たせている仕組みに子どもたちを分け入らせることであった。そしてこのことは、恩物によって、恩物における遊びによって可能となるのである。恩物はしたがって、この法則を、子どもたちに告げ、知らせるための媒介物として意味づけられてくる。

シュプランガーは恩物における遊びについて次のように述べている。

同様のことは、就学前段階のための恩物活動についても妥当する。…この子どもらしい組み立ての意味は、フレーベルによれば、神の創造力に相当するものである。子どもは遊びの活動を通して、自らの内に予感的に備わっている神的な世界法則の持ち分を外に向けて表現しなければならない。…したがって神的なものが子どもの遊びにはひらめいている。しかしこのような幼児の創造行為は単に、「法則の下での自由」に過ぎない。というのは、規則的な原立体との生命的合一の中で、児童の想像力がどれほど自由にそして多様に活動しているとしても、その想像力は、常に知らず知らず法則にかなった基本形態や動的な基本法則に結びつけられているからである。(ibid. 357=97)

恩物を用いた組み立て遊びは「神の創造力」に相当し、このことから、子どもの遊びには「神的なものがひらめいている」ことを認めはするものの、シュプランガーの理解は、そのことそれ自体に力点を置き、ロマン主義的な子どもの遊戯観との接続には向かってい

ない。それよりも、子どもの創造行為が、「法則の下の自由」に置かれ、ある基本法則に限定された形でのみ発揮されるものであることの方を強調しているのである。このことはシュプランガーの恩物解釈が、子どもに世界の秩序を教えるものとしての側面を、外なるものを内なるものへともたらすための教授的な機能を見出していることを意味している。したがって、「世界の中の数学に生命を与えること、ここに幼稚園期の恩物の意味がある」(ibid. 357=97)。「未だ知的に知ることができない幼い存在に、世界の秩序とリズムを教える方法」(ibid.)が恩物における遊戯の理論なのである。

C. シュプランガー解釈と以後の研究の関係

以上見たようにシュプランガーはフレーベル思想の根幹に自然科学的な法則を置いたが、このような思想の形成過程において、青年期の読書体験が指摘されている。そこでは、「シェリングの思弁的な自然哲学や自然の中に心を求めるノヴァーリスの自然解釈」(ibid. 332=53)が挙げられ、「E.M.アルントの『人間陶冶に関する断章』(1805年)がおそらくは、彼にとって教育学の文献を読んだ最初だったであろう」(ibid.)とも言われている。このような観点には、後のボルノウの研究へと引き継がれていくフレーベル思想のロマン主義との親和性という着想を読み取ることができる。

このことは、遊戯の思想に関しても指摘しうる。シュプランガーはフレーベルに固有の特徴は、自然哲学的考察にもとづいた、法則性に支配された遊戯の理論である点であり、それ以前の、「民族的資料の中から様々なものを復活させ、解放した」グーツムーツとも、「人間的行為として遊びのために最高度の哲学的弁明を行っている」シラーとも異なっていることを明らかにした(ibid. 343=74)。だがその一方で、この遊びを支配している規則性がゆえに、「利害を離れて美的な満足の喜びの目覚め」が生じるのであり、「人間的な環境に起因するなじみ深い様々な意味に気付く」と述べ(ibid. 357=100)、「フレーベルにおいてはじめて、遊びは全体的な発達のための方法として、このような高い地位を獲得する」としている(ibid. 360=102)。さらに続けて、「…それはシラーに見られるのと同様…人間としての品位にふさわしい、そしてそのような人間に不可欠の活動として、評価されたのである」(ibid.)とまで述べている。このようなシュプランガーの考察は、90年代以降の少なくとも二つ

のロマン主義研究において継承され、発展的に論究されているのを見ることが出来る。その一つは、一度はフレーベルの固有性を強調するがために否定していたが、シラーの遊戯概念との接近という問題であり、この着想はパーダーがロマン主義的子ども観研究において詳細に分析することになる(Baader, 1996a)。もう一つは、フレーベルが遊びを「人間としての品位にふさわしい」活動として評価したという、人間学的な遊戯観への接近という問題であり、この着想はウルリヒが「創造的源泉としての子ども」という観点から論究することになる(Ullrich, 1999)。

とはいえ、シュプランガーのフレーベル研究において明らかにされたこと自体は、フレーベル思想が自然科学的な基礎付けを持っていること、そしてこのことから、恩物における遊戯には数学的な教授の意味があることであった。このことは、シュプランガー自身が第一版の序論で述べているように、フレーベルの「難解な哲学的思考過程と、保母職へと養成されるはずの、若い女性たちとの意識状況との間には、しばしば不調和が見出される」(ibid. 328=7)当時の現状に対して、フレーベル思想の輪郭を描き出すことから、幼稚園教育の実践に思想の意味を提起しようとする努力からきていると思われる。その意味でこの論文は、ホフマンが指摘したように、フレーベルの恩物体系が持つ教授的な意味を十分に弁護し得るものであった。そしてこの、20世紀はじめに表れたフレーベルの遊戯理論が持つ教授・学習の側面に着目する解釈は、20世紀半ばを席卷したロマン主義的な解釈においてはほとんど顧みられず、完全に忘れ去られたかに見える一時代を迎えるのだが、20世紀後半から21世紀にかけてのハイランドにおいて、再び接近して表れてくるのだった。

第二章 ロマン主義的解釈をめぐって

90年代以降のドイツにおけるフレーベル研究の動向に注意を払っている一部の研究者を除けば、今日なお、フレーベルをロマン主義的思想的潮流から解釈することは、ほとんど疑いの余地なく受け入れられているとあってよいだろう。ノヴァーリス、シェリング、フィヒテらによって思想的土壌を育まれ、ジャン・パウロ、シラーらの遊戯の理論を継承的に発展させ、これを乳幼児期に適合的に体系化した、という、ロマン主義者としての完全なフレーベル像が成立している。本章ではこのようなロマン主義的解釈の礎を築いたボ

ルノウの研究、そしてボルノウの着想からさらにそれぞれのテーマを発展させたバーダーとウルリヒの90年代のロマン主義的子ども観研究を取り上げることから、ロマン主義とフレーベルの関係がどのように結ばれてきたのかを検討する。

A. フレーベルとロマン主義

1952年、フレーベル没後100年の記念祭に奉じるものとして、ボルノウは、『ドイツ・ロマン主義の教育学—アルントからフレーベルまで—』(Bollnow, 1952=1973)を公刊した。同書は当時構想されていたボルノウの教育史全五巻の中の第四巻にあたるもので、初版の序文によればこの教育史全書は、「教育史を、今日でもなお絶滅していないあの二流精神の偏狭さから解放せん」ことを目指し、「包括的な精神史のより大きな全体のなかへと置き入れ」という明確な意図のもとに構成された(ibid. 7=9f.)。したがってボルノウが同書において、アルント、ジャン・パウエル、フィヒテ、ヤーンを挙げ、「文学、音楽、絵画、哲学その他と並んで、また固有の教育学をも内包する統一的なロマン主義の運動が現に存在すること」(ibid. 15=24)を明確に打ち出し、ドイツ・ロマン主義に固有の教育学という領域を展開したことは、教育史全体において貫かれるテーマに基づいていたと考えられる。

1. ボルノウのロマン主義理解とフレーベル

フレーベル解釈として決定的であったのは、ここでボルノウがフレーベルを「ドイツ・ロマン主義教育学の華」としてその中心に位置づけたことにある。「フレーベルは、ロマン主義の教育学をその完全な展開の段階において提示する」(ibid. 91=41)、「彼の教説はその細部に到るまで、このロマン主義の諸前提からのみ理解し得るもので…ただこの中心点からのみ、フレーベルの全体像への接近は可能となる」(ibid. 95=46)。つまりロマン主義教育学という領域は、フレーベルにおいて完成するのであり、またこのことから、フレーベル思想もまたロマン主義という文脈からのみ適切に解説可能であることが主張されている。

ここでボルノウはロマン主義の基礎付けを、ノヴァーリスとシェリングによって行っている。ノヴァーリスは『ザイスの学徒』において、カントの先験的観念論、すなわち「人間の精神のなかに直観と思考の諸形式がはじめから(ア・プリオリに)存在し、その助けでわれわれは自然を把握する」(括弧内引用文のまま、ibid. 16=27)に対して、自然界において

作用している諸法則性の、人間精神との類似を主張する。人間はしたがって自己の内部へ目を向けることによって、自然をより深く理解することができるのであり、またこの逆に、人間は自然を探求することによって、自身の本質を解明し得るのだという。さらに『青い花』に登場する鉱夫が、この「内部への道というロマン主義の象徴的な具現」であり、「自然の隠された基底部へ突き進み、そしてそこで、人間の生そのものにとっても同時に重大な意義を有する神秘にでくわさんとする努力」は、フレーベルにおいてもなお引き継がれているとしている(ibid. 17=28)。

シェリングはフレーベルの思考過程の理解にとって必要であるとされる。その一つは、シェリングの客観的観念論と呼ばれる自然哲学であり、「主体としての自然」という新しい自然観察の可能性を生み出した。これは経験的自然観察の成果である自然科学とは異なり、「内的必然的關係において把握する」試みであるという(ibid. 19=33)。ここから弁証法的法則に基づく「同一哲学」が生じる。つまりテーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼの原則に基づく同一の道筋である。「この統一から再度、同じ差違と無差違の展開が生ずる」点は、「フレーベルの後期の思想界に対する刺激として重要」とであるという。そしてなによりも、シェリングの芸術哲学における、「象徴」(Symbol)が、「無限を有限の中で描写することを可能ならしめる手段」(=36)として指摘される。「そこから、ロマン主義の象徴理解への基礎が生ずる。これはやがて、フレーベルにおいて、子どもの世界の構成にとって教育学的に多くの稔りをもたらしたのである」(ibid. 21=37)。

以上のようにボルノウは、ロマン主義の基礎付けを、文学的哲学的意味において求め、ここからフレーベル思想を解説する手掛かりとした。当然の事ながら、ここでは未だ80年代の子ども観研究における成果、すなわちロマン主義期に固有の子ども観という枠組みは考慮されていない。

2. ロマン主義的子ども観研究とフレーベル

歴史的に構成された子ども観に関する研究という立場から、Chr.ベルクは、ロマン主義的子ども観の特徴について、啓蒙主義的な子ども像よりも、より知覚可能な形で、理想化した子ども像の典型を強調したことを指摘している(Berg, 2004: 503)。

早期ロマン主義は—外見上極端に対照的に—子どもを、純粋な、素朴な、自然な、無邪気な土台へと押し上げた。そして、最終的には子どもそれ自

体に具体化した、いわば宗教的な愛の奇跡への子どもの憧憬のメタファーへと強引に引き上げた。今や子どもは現在や未来のために教育されなければならないのではなく、直接時代に対抗して、あらゆる種類の時代精神に絶対的に対抗して教育されなければならないのである。(ibid.)

こうして子ども時代が、あらゆる可能性に開かれた、未だ社会的・文化的に汚されていない、自然を保持した無垢な状態として神聖視されていく。ベルクはシラーの「子ども時代はたった一つの、我々が文明化された人間性の中で今でも出会う事のできる、欠けた所のない自然である」⁵やティークの「子どもは美しい人間性そのものである」⁶を用いてこのロマン主義的心性を論拠付けている。

ノヴァーリスとフレーベルの関係も、ボルノウが「内部への道」において説明付けたのとは異なり、むしろこの子ども時代に対するユートピア的な憧れゆえに結びつけられることになる。というのもノヴァーリスは、人類にとって失われてしまった無垢を取り戻し、再び自然との調和的な統一によって暮らすことができるようになるために、すなわち失われた楽園を取り戻すために、子どもを神と直接関係づけたのである。「子どもたちがいるところ、そこに黄金時代がある」(ノヴァーリス)。つまり「子どもにおいて、世俗的なものと天国的なものとの接続が、もう一度想像可能になる」(ibid. 504)というのがロマン主義的子ども観の根幹に位置付いている。そしてこの神聖性、崇高性を映し出す子どもという思想が、「後にフリードリヒ・フレーベルによって幼児教育の実践へと組み替えられた」(ibid.)とベルクは指摘している。

B. 遊戯理論解釈

ボルノウはフレーベルの遊戯論の形成過程を、二つの段階に区別している。その第一の段階は、イヴェルドンのペスタロッチのもとで着想を得、『人間の教育』において展開をみるまでであり、第二の段階は恩物の思想や『母の歌愛撫の歌』にみられる、遊戯を思想の中心的なテーマとする時期である。おそらくボルノウのこの区別は妥当していて、フレーベルの遊戯論には前期と後期に分けられる、理論上の変遷が伺われる。したがって本節でもこの区別を採用して、ここでは第一の段階を問題にし、恩物の思想が表れてくる時期については次節において扱うことにする。

1. フィヒテ「道徳力の根源として」

第一の段階の特徴は、遊戯に道徳力の根源を見出すという、ロマン主義の精神よりもフィヒテの思想に基づいている点であるという⁷。ボルノウはこのことを、フレーベルがペスタロッチの学園にいた当時を回想している報告書の中から、次の一文を引用することによって導いている。

私はその遊戯とこれに関係あるものの中に、この学園の生徒や若者の道徳力の根源を認めた。…また当時は、遊戯の持つより高次の象徴的意味は私の念頭に起こっていなかったが、しかし私は純真に遊戯をしている少年や青年のいずれにも、私が最高の尊敬を払っていた道徳的な精神力と身体力とを目撃した (Fröbel, 1962: 100)。

ここでフレーベルが見出しているのは、遊戯がもたらす「道徳力の根源」である (Bollnow, op. cit. 156=144)。子どもの遊びには自発性の喜びということが経験されるのであり、このことが、「人間の道徳教育にとって決定的なことは自発性の発達である」とした、フィヒテの思想への接近をあらわしているというのである (ibid. 157=146)。ボルノウによればこの着想は1826年の『人間の教育』においても引き継がれているのであり、たとえば「この時期の遊戯は…単なる遊びごとではない。それはきわめて真剣なものであり、深い意味をもつものである」(Fröbel, 1968: 36=1997: 71)や「遊戯すること、ないし遊戯は、幼児の発達つまりこの時期の人間発達の最高の段階である」(ibid.)という、子ども時代の遊戯に対する高い評価につながっているという。

つまりボルノウは、第一の段階におけるフレーベルは、子どもの遊戯活動に伴う「自発性の喜び」という経験を見出し、この自発性を育むこととの関係において、子どもの遊戯への特別な敬意が払われていた、という構造を描き出している。これはボルノウがこの時期のフレーベルの遊戯観を、「ロマン主義の精神よりもフィヒテの影響」(Bollnow, op. cit. 157=148)との関係から読み解いたことから導かれている。

しかしロマン主義研究は、子どもの遊戯に関する固有の意義を明らかにしている。そしてこの文脈から、フレーベルの遊戯論が、ボルノウとはまったく異なった形で導かれてくることになる。

2. ロマン主義研究における解釈

バーダーは「劣等的な大人、優越的な子ども」(Baader, 1996b)において、ロマン主義の子ども観が

社会批判から形成されてきたことを指摘している。

世の中の混乱からいまだ手つかずにある子どもたちは、本質的に罪のない、統一や全体性と結びつけられた。彼らの存在は、市民社会の中で自己分裂に苦悩している人々とは異なる存在として、対抗的に立てられたのである。(ibid. 191)

さらにベルクは、こうした社会批判的な子ども観が、とりわけ子どもの遊びへの、ロマン主義的な意味づけと結びついて生じたことを明らかにしている (Berg, 2004: 504)。

ロマン主義的な子ども時代の議論では、とりわけ子どもの遊びにおいて実現している、目的から自由である状態が、あらゆる経済的な目的化に、労働や義務に、どん底の日常生活に対抗する、絶対的な理想となる。(ibid.)

こうして子どもの遊びは、ロマン主義において、その活動の意味のなさがゆえに価値を見出され、目的や労働といった意味のある活動との対抗軸として、崇高な活動として高められるようになる。子どもの遊びに関する理想化が起こったのである。「そうであるからこそ、子ども時代や子どもの意味が特別なやり方で保護され、守られなければならない」(ibid.) という、子ども時代に関する教育学的な議論が生じてくる。ベルクによれば、これがロマン主義的な子ども像と同時に構想された、ロマン主義的な教育学のコンセプトであるという。

さらにウルリヒは、『創造的源泉としての子ども—ロマン主義的子どもの生成と教育学的考察への影響の研究—』(Ullrich, 1999)において、このようなロマン主義における子どもの遊戯観とフレーベルを次のように結びつけている。

子どもとの遊びや会話において、大人もまた、彼らの中に埋め込まれている内なる子どもへと回帰し、同様に大人たちもまた神聖で完全なものへと戻ることができる。大人たちは自ら「全面的な生の合一」(フレーベル)へと立ち戻り、精神と事物に関する、精神的—神聖的な全結束性を体験するのだ。(ibid. 354)

このようにロマン主義的な子ども観研究は、子どもという存在を、世俗的な大人たちと、失われた楽園とを結びつける特別な存在として見出し、この子どもへの神聖性という心性の文脈において、フレーベルを位置づけた。そして子どもの遊戯という活動も、その活動それ自体の喜びや、目的から自由であることによって、もはやそのような活動を失ってしまった大人たち

に、神聖性や完全さを取り戻させる活動として捉えられたことを示した。フレーベルの遊戯もまた、子どもの遊戯の中にある、特別な神聖性という文脈において解釈されている。

遊びにおいて獲得された「より高次の意識」は、フレーベルにおいて、「神の似姿」への接近という、人間の可能性として考察された。そうしてフレーベルでは、遊びの中で、子どもの神性が保護養育される、ということになる。(Baader, 1996a: 234)

このことは、ボルノウがフレーベルの初期の遊戯概念を、フィヒテとの関係から「道徳力の根源」として捉えたこととは異なっている。この場合遊戯は自発性の発露として意味を見出されている。しかしロマン主義研究の場合、そもそもは子ども遊びのにおける意味のなさが、有用性とは対極にある活動として発見され、大人たちから特別な意味を与えられる活動となり、それゆえに保護養育の対象として解釈されるようになったとしているのである。このことからフレーベルの遊戯も、子どもの遊戯の神聖性という側面から、解釈が立てられているのである。

C. 恩物における遊戯の理論

恩物における遊戯の理論を問題にする際焦点となるのは、この遊戯を支配している規定性をどのように意味づけるかである。この規定は、フレーベルが恩物を考案した当初から、遊びに授けていた「遊戯の方法」に由来する。フレーベルは個々の恩物にそれぞれ「遊戯のための手引書」を添付し、ここで、箱からの取り出し方から、子どもへの提示の仕方、そして用いられ方までを詳細に記述したのである。恩物の遊戯論に関する議論は、したがって、この「手引書」をどのように解釈するかをめぐってなされてきたといえる。

だがフレーベルは恩物における遊戯論を一冊の著作としてまとめたのではなく、1838年の『日曜誌』(Sonntagsblatt)において、あるいは個々の恩物に添付された「遊びの手引書」(Broschüre)において発表した。そのため恩物における遊戯論の概観は、20世紀の実証主義的な研究の成果によって恩物選集としてまとめられるまで、把握することが困難であった。

これから取り上げようとしているボルノウが、第一恩物における最初のボール遊びの理論に言及している。そのため、恩物における遊戯論の分析に入る前に、ここで若干フレーベルが記した第一恩物における遊戯の始まりの部分を紹介しておきたいと思う。以下

の紹介は、フレーベルが「第一恩物のための手引書」として『日曜誌』に掲載した、「ボール、子ども時代の最初のおもちゃ」(Der Ball, das erste Spielwerk der Kindheit. 1838)⁶に基づいている。

第一恩物は六色(赤・青・黄・緑・橙・紫)で六個一組の、柔らかい羊毛でできた、直径約2.5センチほどのボールである。このボールには紐がつけられていて、吊すことができるようになっている。フレーベルはこの紐の部分をもつて、乳児の目の前に差し出すことを、「最初の遊び」として紹介している。乳児はおそらく目の前にぶら下げられたボール小さな手を伸ばして掴もうとするであろう。そして、掴むことに成功するだろう。フレーベルは、乳児がボールを掴んだら、母親がそっと紐の部分をつまむことを指示している。すると子どもの腕が、まだしっかりとボールを握っているのに、母親の手の動きとともに上下することになる。「上へ、そして下へ!」あるいは、「むこうへ、そしてこっちへ!」。この上げ下げの遊びは、やがて次の重要な局面を迎える。それは、こんな時である。

…ボールが子どもの手から滑り落ち、そしてボールが子どもの前で、ある独立した対象物として静かに動く時である。この遊びによって新しい感情が、また前にはしっかりと握っていたが、いまは自由に動きそして自分と対立している何かあるものである対象物についての新しい知覚が、子どもに発達してくる。(Fröbel, 1963: 24=1991: 63)

以上が第一恩物、ボール遊びの始まりの部分である。

子どもはボールを「つかみ」、振り子運動によって再び遠ざかることによって、再び手放すことになる。ボルノウはこの遊びを取り上げ、次のように指摘している。

この遊戯はフレーベルにとってきわめて重要な意義を有している。この遊戯において幼児は…合一と分離および再合一というより深い生命経験、すなわちフレーベルが「生の合一」の名のもとに人間の生一般の根本問題として強調する基本問題を経験するのである。(Bollnow, op. cit. 163=157)

このことからボルノウは、プロッホマンがこの個所でディルタイの「生の範疇」(Lebenskategorien) という概念を導入することに賛同を示している。

「生の範疇の全圏、現所有と既所有、合一と分離、現在と過去と未来、多様性と統一は、たえず反復される遊戯において体験される」(TI 4)。「生の範

疇」とは、人間がその生を把握する簡単な一般的形式の謂であって、理論的観察によって獲得されるのではなく、行為しながら生の真中にあることそれ自体によって獲得されるものなのである。この生の範疇は、遊戯においては確かに幼児によって概念的にはなく、体験において予感的に獲得される。(ibid. 163=159)

つまり恩物において子どもの遊戯は、「現所有」と「既所有」、「合一」と「分離」、「多様性」と「統一」という、異なる二つのカテゴリーを結びつける、中間的な領域としてその機能を発揮していることになる。「このボールとの単純な遊戯において遂行されるのは、まさに「生の区分」そのもの」(ibid. 164=159f)であり、それゆえに、「この遊戯の究極的秘儀は、絶えざる変化の中に同時に、あらゆる変化から免れている深い法則性が隠されていることに存する」(ibid. 168=166)という。

この「法則性」ゆえに、ボルノウにおいて、恩物における遊戯の規定的な意味が導かれる。つまり、恩物における遊戯は「指導された遊戯」であり、「この遊戯を指導し調整する大人、つまりフレーベルのいう「遊戯指導員」が常に傍についている」必要が生じるのである(ibid. 168=167f)。「遊戯指導員は遊戯を指導し調整して、その際に生活経験との完全な交わりが最後まで遂行されるようにせねばならない」(ibid.)。

しかしそれによって、この遊戯の危険が生ずるかに見えるのであり、これまでも往々にして、この点がフレーベルに対する批判として指摘されてきた。その危険とは、この厳しく調整された遊戯過程のもつ杓子定規さであり、これが幼児の創造力の自由な発達を阻止するというのである(ibid.)。

だがボルノウは続けて、生の形式との交わりが、自由な創造活動のためには必要であるとしながら、この批判が当てはまらないということを主張している。「フレーベルが展開した首尾一貫した全体は、遊戯の使用法として直接的に理解されるべきではなくて、むしろ大人のための先行的導入として理解されるべきである」(ibid.)。

つまりボルノウはフレーベルの「手引書」は恩物遊びの一つの参照枠とすべきものであり、フレーベルが目指しているのは、この方向づけからさらに発展的な遊戯が生まれ得るものであることを示唆しているのである。

バーダーは、『ロマン主義的子ども観と子ども時代』

(Baader, 1996a)において、「フレーベルの恩物は…強い指導力を持った手引書を必要とする。手引書なしに恩物を子どもたちに使用させるという状況はほとんどない」とし、ボルノウが「この厳しく調整された遊戯過程のもつ杓子定規さ」と呼んだ遊戯の規定性にこそ、シラーとの共通性からフレーベル遊戯論を読み解く鍵があると主張した (ibid. 232)。バーダーのこの解釈は、ボルノウが消極的にしか評価し得なかった恩物の遊戯論が持つ規定的な側面に着目し、これをシラーの遊戯論と関係づけることから、より積極的に発展させたものとして捉えることができる。

バーダーによれば、「規則に基づく遊戯への関心」から出発していることこそが、シラーとの共通のメルクマーレであるという。そしてここから両者は、道徳性の促進のための遊戯の可能性を見た。というのもフレーベルはシラーと同じように、遊戯を「自由」や「道徳性」へと導き入れるものとして捉えたのである。この論拠をバーダーは、フレーベルの次の一文によって示している。

この精神は、遊びに、子どもたちへと作用する魔法のような効き目を授ける。気随気ままから秩序へ、必要性から自由へ、外側から内側へ、発見から認識へ、知覚から思考へ、そして、あらゆるこれらのことの繰り返しから、再び意味のある行為や倫理的な生へと導くのである。(Fröbel, 1982: 191)

フレーベルはシラーと同様に、「必要性」から「自由」へ、「感性」から「道徳」への移行が実現するような状態、そのような実現を生み出す状態として遊戯を位置づけた。したがって、シラーが「肉体的な世界」から「観念の世界」へと呼んだものを、フレーベルは「外界」から「内界」へ、すなわち「対象の世界から精神的な世界への移行」と呼んだのである (Baader, op. cit, 233)。つまり「遊戯は、シラーにおける場合もフレーベルにおける場合も本質的に接続の為の媒介 (Medium) なのである」 (ibid.)。

こうしてバーダーは、恩物における遊戯理論にある規定性は、遊戯によって自由や道徳性へと接続されるために重要な役割を持つものとして積極的に解釈したのである。

ボルノウは、恩物における遊戯を、その扱われ方にまで遡り、これを「生の範疇」というディルタイの概念に依拠しながら分析した。そこで子どもの遊戯は、「合一」と「分離」あるいは「多様性」と「統一」という、二つの相反する状態の架け橋となっていることを指摘

した。しかしこの遊戯自体が大人からの指導によって展開しているという側面、すなわち遊戯指導員が遊戯それ自体を方向付けなければならないという、恩物の遊戯論が持つ指導的、規定的な側面については、フレーベルの「手引書」を消極的に評価することによって説明としたに過ぎなかった。これに対してバーダーは、「手引書」がもつ遊戯への拘束力を強調し、これを積極的に評価した。バーダーはシラーとフレーベルの遊戯論を対比させて分析したことから、この規定が働くがゆえに自由への移行が可能になるという、遊戯の架橋する機能をもう一度ここで適用してみせたのである。

したがってバーダーもボルノウも、フレーベルの恩物の遊戯に、二つの異なる領域を結びつける機能を見出している。つまりロマン主義的な解釈においては、フレーベルの遊戯概念を、媒介の機能において解釈したといえる。

第三章 フレーベル遊戯概念の位置づけをめぐって

フレーベル思想をロマン主義の文脈との関連から解釈することは、前章でみたように、ボルノウ以後も家族史・子ども観研究、ロマン主義研究などさまざまな分野においても試みられてきた。現在ではこのような解釈を否定する立場に立つハイランドもまた、当初はボルノウの解釈を継承するような形で研究を開始していた。ハイランドは当時を振り返り、「わたしのフレーベルの言語研究 (*Die Symbolwelt Friedrich Fröbel*, 1967) は、ボルノウのフレーベル解釈の影響を受けたものであり、フレーベルの遊戯教育学を中心におくのではなく、当時の学術的な通説と同様に、フレーベルの『人間の教育』の教育哲学ないし人間学を中心に置いていた」と述べている (Heiland, 1998: 1)。

しかしハイランドは、W.フリットナー、ホフマンらの恩物選集の刊行により、次第に恩物における遊戯の理論が、フレーベル教育学の中心に置かれているという理解に到達する。ここから遊戯理論への関心が生じ、80年代にはフレーベルの遊戯概念に関する受容史の研究に向かった (Heiland, 1982)。しかしこの作業からハイランドは、フレーベルの遊戯概念を正確に把握するためには、一次史料が決定的に不足していることを認識する (ibid. =2)。以後ハイランドの仕事は、フレーベルの遺稿の収集という、実証的なアプローチを精力的に行うようになる。ここでハイランドの膨大なフレーベル研究の足跡とその意義とを、すべて紹介

するわけにはいかない。したがってハイランドが一次史料の精査から導き出してきた、近年の遊戯理解に限定し、そのロマン主義的解釈への批判点を取り上げるに留めたいと思う。

A. ハイランドの遊戯概念解釈

2003年、ハイランドは「フレーベルとロマン主義—ハイナー・ウルリヒとの論争—」において、ウルリヒが1999年、『創造的源泉としての子ども—ロマン主義的子どもの生成と教育学的考察への影響の研究—』において、ロマン主義的子ども像の完成をフレーベルにおいて見出したこと、すなわちフレーベルをロマン主義者として位置づけたことに反論している(Heiland, 2003)。この反論の道筋を追うことによって、われわれは、ハイランドのフレーベル遊戯解釈を輪郭付けることができる。

本論第二章B-2.で引用したように、ウルリヒは、子どもの遊戯に「精神的—神聖な根源」を見出すロマン主義的な遊戯解釈とフレーベルを結びつけて論じ、子どもとの遊戯において「大人たちもまた神聖で完全なものへと立ち戻ることができる」とし、「大人たちは自ら『全面的な生の合一』(フレーベル)へと立ち戻り、精神と事物に関する、精神的—神聖な全結束性を体験する」とした(Ullrich, op.cit. 354)。このことから子どもは、教育が必要な対象として、不完全で未熟な存在としてではなく、「大人にとって原初性のひな形となる」(ibid.)。ウルリヒはこのような子ども観を「啓蒙主義的合理性克服の試み」であるところの、ロマン主義的子ども観であるとし、フレーベルにおいてその完成を指摘したのである(ibid.)。

これに対してハイランドは、フレーベルにおいて子どもと大人の遊びは、完全に教授や教化の意味において指示されているものであることを主張し、その論拠として次の『人間の教育』パラグラフ33を例に上げている。

こうして、人間のすべての力やすべての素質を覚醒し、発達させ、刺激して、人間のもろもろの素質やもろもろの力の要求を充たすことができるような、それを満足させることができるような能力を、人間の四肢や器官のすべてに付与すること、これが、両親や家庭や家族の範囲内で行われる母親および父親による児童保育の対象であり、目的である。なにも教えられなくとも、またなんらの要請も受けずに、さらにどんな学習も経ずに、生みの母は、自然に、自ら、このことを行っている。

しかし、これでは十分でない。彼女が、意識的な存在として、意識的になりつつある存在に働きかけながら、しかも意識して人間の連続的な発展に導くべきものとして、一定の内面的な、生きた、意識された連関の中で、およびこの連関をもって、これを行うことが必要である。それゆえ、わたくしは、彼女の活動を述べることによって、その活動の本質や意味や連関を、彼女に意識させたいとおもう。なるほどきわめて素朴な、しかし注意深い母親は、ここに示すよりももっと正しく、もっと完全に、もっと深く、このことをなすことができるであろう。しかし、人間は、不完全なものを通してこそ、完全なものに高まるのである(Fröbel, 1982: 39f=1997: 79)。

ハイランドは、ここでフレーベルが記述していることは、母親から乳児に対する教授的な指示、すなわち「乳児の教化」(Klienkindbelehrung)であるという。

乳幼児の遊びの保護養育という豊富な事例は、愛撫を断念し、子どもに、身体性と環境との関わりとを意識させ、注意を払うように呼びかけているものなのである(Heiland, 2003: 299)。

つまりハイランドは、フレーベルが構想した「遊戯」とは、ロマン主義的な遊戯概念とは全く相容れないということを主張しているのである。それは、規定から自由へ、多様性から統一へ、あるいは世俗的な大人を神聖な楽園へ、等々というような、異なる二つの領域を架橋するような意味においてではない、ということの意味している。

ハイランドによれば、フレーベルの教育学はそもそも「育ちに委ねること」(Wachsen lassen)と「導くこと」(Führen)という弁証法を内包している。この弁証法は、「教育—教授的なコンテキストが、明確に子どもの力の展開を方向付けている」(ibid: 300)のにもかかわらず、フレーベルによって子どもの自己生成的な力の展開として記述されているのである(ibid.)。だがこの「子どもの自己生成」と呼ばれているものの中身は、ロマン主義的な創造性の源泉にあたるものではなく、「子どもの自発性と教育的な働きかけとが分かちがたく密接に結びついている」(ibid.)ものである。したがってハイランドは、フレーベルの遊戯概念もまた、教育や学習の教授同様、大人からの意図的な働きかけによってはじめて成立するもの、として解釈している。

B. 「神性」を除外した遊戯解釈

ハイランドが主張する、フレーベルの遊戯概念における教授、教化的な意味付けは、当初シュプランガーが恩物の体系に数学教授の意味を見出したことと非常に接近している。しかしそのシュプランガーにおいてさえ、子どもの遊戯に神の創造力に匹敵する「神的なもののひらめき」を認めており、このような子どもの遊戯に秘められた神性の問題は、ロマン主義的な解釈においてより深く掘り下げられたのである。しかしハイランドにおいてこの要素はまったく除外され、教育するプロセスにおいてすべてが説明づけられるのである。

例えばハイランドは、「神の子」としての被造物としての子どもの形成衝動や創造性を、次のように論じている。

『人間の教育』はしたがって、「生の合一」のための、「発達しつつある—教育されつつある人間の陶冶」手助けであり、…神の創造に基礎付けられているとはいえ、科学的に捉えられ、形式化可能な、外界と自己との法則を認識するプロセスなのである。フレーベルのあらゆる記述には、決定的に、フレーベルの球体哲学において基礎付けられているこの関連が見出される。この関連というのはつまり、生命の力、子どもの「形成衝動」や創造性であり、また「神の子」としての被造物の性質でもあることが強調される。しかしながらこの「神の子」としての被造物の性質は絶えず、教育的なコンテキストにおいて論じられるのである。(ibid. 301)

ここでフレーベルの遊戯概念解釈は完全に逆転しているといえる。ハイランドにおいては、ロマン主義的な解釈において最も着目されてきた子どもの遊戯が持つ創造性や「神の子」としての性質が、教育的なコンテキストを全面に押し出すことによって、退けられてしまっているのである。ハイランドにおいて子どもの遊戯を保護養育するということは、パーダーが指摘したように、「子どもの神性を保護養育する」(Baader, 1996a: 234) こととはまったく意味が異なっており、それは大人からの意図的、意識的な働きかけによって「外界と自己との法則を認識する」ための教授のプロセスに過ぎない。したがってロマン主義的な解釈において常に問題となってきた、恩物における遊戯の規定性も、子どもの認識を方向付けるために必要な「大人による意味の示唆」(Heiland, 2003: 305) として矛盾なく説明付けられるのである。

結びに代えて

本論では以上のように、20世紀における、フレーベルの遊戯概念に関する二つの解釈を問題にした。シュプランガーはそこで基点となる二つの解釈の可能性を示したといえる。その一つは恩物における教授の機能であり、このことは、恩物の遊戯が、大人からの積極的な指導や方向付けによって成立する「遊び」であることを示すものである。しかし他方でまたシュプランガーの解釈には、フレーベルが子どもの遊戯に対する神的なものの表れを捉えてもいたことを示唆していた。後者の要素は20世紀半ばのボルノウの研究によって、フレーベル思想にあるロマン主義的な要素として強調された。このロマン主義的解釈の成立によって、子どもの遊戯活動への大人からの積極的な働きかけは、子どもの神性へと向けられているとされ、子どもの認識を枠付け、教化・教授しているという解釈は、ほとんど影を潜めたかに見えた。このボルノウのフレーベル研究を基点にして再び、この着想を発展させる形でパーダーやウルリヒ、これに反論する形でハイランドの研究を位置づけることができるだろう。ハイランドは再び、フレーベルの遊戯を教化の意味に位置づけたのである。

このような多様な解釈の背景に置かれてきたのは、より大きな、人の育ちに対する時代の問い、すなわち、乳幼児期の活動をいかに捉えるべきか、という問いではなかっただろうか。大人たちはこれに意識的に働きかけ、意味のある活動へと結びつけ、導くことに人間教育の基礎を置くのか、それとも、この時期の活動を、未だ大人たちの意図的なコントロールのきかない、ある種の偶然性に委ねられたものとみなすのか、という、子ども期の活動に対する根本的な問いである。

このような観点からすると、2003年、ハイランドの解釈は、フレーベルの遊戯概念が、理性の側へ配列されうる可能性を示しているともいえる。つまりルソーが構想したように、「強制—理性」と対立するものとして、遊戯を人間の自然として「自由—自然」の領域に組み入れるのでもなければ、美的人間形成における着想のように、自然と理性、この二つの相反する領域を調停するものとして、遊戯にその媒介の機能を求めるのでもない。フレーベルは遊戯—学習—労働へと同心円的に広がっていく活動の一つの形態として、子ども時代の遊戯を捉えている、というものである。しかしこのように捉えると、フレーベルの遊戯概念は、いつでも学習や訓練のための準備として、組織された活

動としてのみ表れてくることになる。フレーベルの遊戯概念はしかし、果たして本当にこのように考え得るものなのであろうか。このハイランドの解釈を問うための一つの手掛かりとして、ホフマンの「遊戯の保護養育」(Spielpflege) という概念に着目したフレーベル研究をあげることができるだろう⁹。ホフマンはこの解釈によって、この時期の子どもの遊戯は、就学年齢に達した子どもにとっての、学習や遊びという区別が未だなされていない、理性—自然、強制—自由などといった対立する緊張関係へとはいまだ分岐されていない活動として説明したのである。このホフマンの遊戯研究との関連からハイランド解釈を検討する試みは、今後の課題として残されている。

(指導教員 今井康雄教授)

参考文献

- Baader, M.S. 1996a "Die romantische Idee des Kindes und der Kindheit" Luchterhand
- Baader, M.S. 1996b "Unterlegene Erwachsene, überlegene Kinder" In: Generation. Liebau, E. Wulf, Chr.(Hg.) Deutscher Studien Verlag. S.190-200.
- Berg, Chr. 2004 "Kind/Kindheit" In: Historisches Wörterbuch der Pädagogik. Beltz Verlag. S.497-517.
- Blochmann, E., Geißer, G., Nohl, H., Weniger, E. (Hg.) 1962/3 "Fröbels Theorie des Spiels. I-III", Kleine pädagogische Texte 4, 16, 21. 3. Auflage. Verlag Julius Beltz. Weinheim.
- Bollnow, O.F. 1952 "Die Pädagogik der deutschen Romantik" 3. überarbeitete Auflage. 1977. Klett-Cotta = 岡本英明『フレーベルの教育学』理想社, 1973年
- Ehrenspeck, Y. 1998 "Versprechungen des Ästhetischen" Leske + Budrich.
- Flitner, A. 1972 "Spielen-Lernen" 1. Auflage 1972, erweiterte Neuauflage 11. Auflage 1998. Weinheim & Basel.
- Fröbel, F. 1962 "Fröbels Theorie des Spiels. I" Blochmann, E (Hg.), 3. Auflage, Beltz.
- Fröbel, F. 1968 "Die Menschengenerziehung" Hoffmann, E (Hg.), 3. Auflage, Verlag Helmut Küpper Vormalis Georg Bondi.=『人間の教育』(上) 荒井武訳, 岩波文庫, 1997年
- Fröbel, F. 1982 "Die Spielgaben" Flitner, W (Hg.), Klett-Cotta.
- Giel, K. 1959 "Fichte und Fröbel" Quelle & Meyer."Heiland, H. 1998 "Beiträge zur Fröbelforschung". Band 5. Georg Olms Verlag.
- Heiland, H. (Hg.) 2002 "Friedrich Wilhelm August Fröbel(1782-1852)" Schneider Verlag Hohengehren.
- Heiland, H. 2003 "Fröbel und Romantik" In: Fröbelforschung heute. Verlag Königshausen & Neumann. S. 297-309
- Heiland, H. 2004 "Der >authentische< Fröbel" In: "Der authentische Fröbel" Friedrich-Fröbel-Museum Bad Blankenburg.
- Hoffmann, E. (Hg.) 1951 "Menschengenerziehung" Friedrich Fröbel ausgewählte Schriften. zweiter Band. Verlag Helmut Küpper Vormalis Georg Bondi.
- Hoffmann, E. (Hg.) 1982 "Friedrich Fröbel: Die Spielgaben" Klett-Cotta.
- Scheuerl, H. 1954 "Das Spiel" 9. Auflage 1973. Weinheim & Basel.
- Scheuerl, H. 1955 "Beiträge zur Theorie des Spiels." 8./9. Auflage 1969. Weinheim & Basel.
- Spranger, E. 1938 "Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt" In: *Gesammelte Schriften* XI. 1972. Quelle & Meyer. S. 328-375 =『フレーベルの思想界より』小笠原道雄・鳥光美緒子訳, 玉川大学出版部, 1983年
- Ulrich, H. 1999 "Das Kind als schöpferlicher Ursprung" Julius Klinkhardt.

注

- 1) ホフマンのこの引用は „Das Problem der Bildung des Kleinkindes“ In: *Ev. Kinderpflege* 18. S. 238-265. にあることが, Heiland, 2003 “Die Fröbelforscherin Erika Hoffmann” In: *Fröbelforschung heute*. Verlag Königshausen & Neumann.において指摘されている。
- 2) “authentische Fröbel” はハイランドの目指すフレーベル研究のモットー。解釈の枠組みを優先させることより, 実証的な史料の積み重ねから「真のフレーベル像」を描き出そうとする独自のフレーベル研究の視点がよく表れている言葉である。(Der “*authentische Fröbel*”. Heiland, 2004)
- 3) Blochmann, E., Geißer, G., Nohl, H., Weniger, E. (Hg.) *Fröbels Theorie des Spiels. I-III.*, „Kleine pädagogische Texte 4, 16, 21“, 3. Auflage. Verlag Julius Beltz. Weinheim. 1962/3
- 5) Schiller, F. „Über naive und sentimentalische Dichtung“. 1795
- 6) Tiek, L. „Über die Kinderfiguren auf den Raffaelschen Bildern“. 1799
- 7) 因みにボルノウは, フィヒテの国民教育をロマン主義教育学の重要な構成要素として組み込んでいる。
- 8) In: Blochmann, E., Geißer, G., Nohl, H., Weniger, E. (Hg.) 1962/3 “Fröbels Theorie des Spiels. I”
- 9) Hoffmann, „Spielpflege“. Vortrag, gehalten im Seminar der Neuen Mädchenschule Bern, erstmals veröffentlicht in den „Mittellungen aus der Neuen Mädchenschule“, Heft 3, Bern 1953, S. 1-15. In: Scheuerl, „Beiträge zur Theorie des Spiels.“ S. 146-157”